



5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5

門1
卷36
508

古川三毛く云



侍御史呂陶言，明堂降赦臣僚稱賀訖而兩省官欲往奠司馬光是時程頤曰子於是日哭則不歌豈可賀赦才了却往吊喪半容有難之日子於是日哭則可歌即不言歌不哭今已賀赦了却往吊喪於禮無害蘇軾遂以鄙諺戲程頤衆皆大笑結怨之端蓋自此始程門朱公掞輩之遂立敵矣

程頤在經筵多用古禮蘇軾嫉其不近人情遂嫌一隙於是右洛黨程子蜀黨蘇軾荊黨劉摯之語

或人曰一日而一悲夫豈不遠哉乍見奸者而謂之言

あつて（）孔文仲がまほ程子と譖訐して入籠に懸と称
養すわざへば胡れ在るべくかす程子もて宋もよ
襄も毛紀と後れよしら程子もよ胡よ三なまくと正相
よも（）国政郭（）まうて宗室長（）かくまうりの恩に章と
まく却て信とおきちうひありハ薄多き生（）うすと
予曰汝世人の慶吊とアラムトモハ絶はシフ義理一扁と
ケアリ（）うよ事（）ハレモトドキテ厚き事（）トキマレ
セヨアリ（）もろひけづきと名（）ハシニ其ノ事（）モトと
弟（）アキハ近ヅルハミテ入（）悲顔（カホ）にて矣止の言とスナ其事（）
於てハ更に悲充（）是猶優の劇と放す所（）アリモ叫（）
（）

或（）參（）ひそく人の面（）がん事（）と御（）て候（）也（）と
有（）事（）一夫（）ぬ（）とて他人（）の悲充（）あつ時（）我（）も余（）口（）
心（）て他の情（）とアラムキセヨ（）併（）て慶吊（）すを
人（）の寢情（）を（）て仰（）かまうすよアサ（）それハ我（）
至親子姪（）の心（）へあつ（）口（）（）併（）て其（）とて次（）
を（）か（）とて居（）とアラムハアリ人（）そ（）と（）
さ（）す（）と（）す歳首并年（）の賀（）付（）て元ニメ（）
其（）付（）を（）入（）本（）庸愚（）トナシ（）（）（）
忌（）アラムト（）あ（）人の寢情（）と（）理（）を（）程子
の寢（）付（）降赦（）したま（）りて（）と（）

れまひうか甚足にて明友の妻モと吊したまひうか
効くよし、こす薦すハ禪者されば礼とあは有る
りす坐客も無シ彼ノ能優もとき青空アオキす
そよと小人コトバ不念ムカシれが知すそれハシガをさく
ちうおおのまうりと余の毒すすふもすされ
あくと能ハゆくかたうき多云接せん敷輦自裁
仰アヤシとあくと抱すこそ侍りハセタナクね
劉定之日蘇軾スズキとえりよゆめく自れ、前と
うてくと攻撃するもやだくから家ありごく
朔寧ソクニンハ自守シテ比兵洛寧ヒボウルニンハ敵す爲すりの兵蜀寧

ハ鄰と侵すをセとくと程門アラタメ止むと待すして
幸運アリとあらうとて程アラと胡アラ室
の幸運アリとまよ候て也こそ遙アリとアリて
ミツアリ正立アリのちと不育アリ室主アリの過アリて
ちトの不幸運アリをすま我期アラタメすりてこそ寛アリ
きくちとたもー政と草アラタメて名と形すべしに於
りとくきつてくわづとひてす御性アリすれど謀アリと
すられ程みけ程みけ所とおは何の處アリいを
居まアリ活寧アラタメハ折邪アリ名づケり所程門

事と云ふやうれりそくみハモムのまことつる
スルハ事の如きす

。寛永十八年二月有テ 台命一諸家三系圖脩撰

總裁 太田備中守資宗

奉行 星合伊左衛門具枝

同 御書預 三雲内記定氏

同 西尾加右衛門正信

同 兵三郎正成

石四人十一月朔依テ金奉行ス之

儒士 林道春

○劉根傳云人患秋狀可システ長生用ニ九寸明鏡照面孰リ視テ
令自識己身秋久則身神不散疾患不入云

李時珍本草發明二月鏡乃金水之精內明外暗古鏡

如古劍若有神明云本草綱目八

謹て按する御皇太神岩屈少厚れうひ財産を
湯て懸之是太神の身神として散せざりあらん爲故
鎮魂の祭もこれより本起りと考へあらへ甚才の
傍とソハ我ハ又の湯湯の方屋を等しく作りよる
古鏡の靈異ありて邪魅忤焉と碎、疫と核の病と照吉

山と祀りたり。龍江錄異聞記樵牧ノ因談西京雜記
酉陽雜俎松窓錄宋史雲仙錄等に多々有る同く
妖妄の事多くても流傳小作書多し。本これハ
博の爲に記之。神書と傳する人乞乞の説ともあつた
トキニ

○京師は妙寺ハ西山中藤ノ忠通草創至一ノ木焉
修造より行幸又どり。一寺多れ。如摩子モ廢ちと
テリハ流俗奉主をも。今ハ甚壊すよし。以降乃の堂舍、
東福禪寺より過者多し。又我尾列中嶋郡國一倚の
國分寺もその附。荒廢して堂舍證跡などハ妙興往來の

有り。古今の行持をも。又其の事も云々す
○世俗称巫女爲神子。倭訓妻子或曰此类加武乎。即巫之畧言也。按楚辭
雲中君朱註云。雲神所降也。楚人名巫為靈子。若其神之子。子ト
セ以此見之。則美乎之称倭漢同其意。美者尊称。備云。伊美音高之
因奉楚辭。禮魂曰成礼兮。會鼓。傳芭兮代舞。淫會鼓。
急疾擊鼓也。芭与葩同。巫所持香草也。神代卷上
一書曰。伊舞並尊云祭。此神之魂者。花時以花祭。又
用鼓吹幡旗歌舞而祭矣。是亦東西一般。故其巫所持
之香草者。古事記所謂千草也。小竹葉似之。此亦
我国招魂之時或降神之祭所為之也。

○大追物檢見沙汰記一卷小倉將監實澄文明十八年正月所述也射家者流可傳習事也

○高木主水佑源清秀英士肖像讚

震靈氣鉄石腸老手握角月

壯志冒氣

霜

斗笠

普

舊詒

廢保

逐燈直桃累室光

彼ノ像鑑ヲ著シ卓筆ヲ慕ムリ挑刃ノ指物ヲ貯ニ騎ス源任久ノ需ニ依テ書置内成ノ辛秋十日

○正日 東鑑立十二秋田坡又義景十三年之佛事云今迎正日供養多至塔
云今之俗去つきとくが正月と申へきひをりと正りとハせ但
歳首の正月よりすまされ候。今年正月もとまハ所無き

○田野の弓箭ちあり戦場人血め泣けよ色或ハ出或没し
もゝ逼りて人の筋毛と牽ひうれと碎傷すほの馬鎧とて
相觸て争と争せば即滅す張革が金葉一振遊光飲光と
争ひ争ひとぞ本草綱目

○格古論曰古玉以青玉為上深綠色者佳淡者次之云
我國往古青八坂瓊と云ハ深綠色古塚の

中同々あ

○鉢擺婆福羅珊瑚の胡語摩羅迦羅

瑪瑙の胡語

琉璃ハ深青のあとくとく之と魏畧格古論あり
異物志等と極すれハ琉璃ハ雲母也其色も白黄黒

青綠縹緋紅紫等種々有之

室香
カサル

用くふと折ハシテ
サケ

蝉翼めやしとノハシテ

鉢又メアリハシテ

アリ

白石英

本サノ集解曰大如指長サニ寸六面如削自澈有光宗號曰白石英六棱白色若冰精云又黄石英赤石英青石英等アリ

梅ナヨ我國深山の石ナキナツナ水晶ハ白石英

ムワカト

契家長坂氏家薦ナアツメトスナソウナ接ナシテ

二三寸ナリナテナカナナナナ先董沢潤磨ケリ

ミナミ水晶と丁解

射子

本草綱目に一物トナスハシテ

射子

云月ナシト用く黃紅色其實ウハタマトニ黒多

鳶尾ハ三四月に花と用ク翠碧色也ヒタヒタ皆是一類ナリテ少異あり

曼陀羅花

曼陀羅ハ胡語唐ノ雜色ト譯ナミ李時珍レア佛經多ニこれトミ

本草ノ集解曰春生夏長獨莖直上高サ四五尺生不旁引

葉如茄葉八月開百花一丸ソ六瓣狀如牽牛花而大云

人傳記依書不同者ノ体漢間多ニ矣此是彼系譜之書又

甚矣古昔之事自今日而不可知之者不可措而論正事

林類曰元之与生下往一反故死於是者安知不生於彼云

又安知告今之死不愈昔ノ之生乎云

列子上
天瑞

死是生彼淳屠氏所謂輪回也是說元出於列子疑淳屠

之說取之以爲已之事次旦周穆王篇所謂西極化人焉

奇術シテ、或上リテ天アメニ而暨イタル天官アメノミコト等シテ、說浮屠モトワキ本シテ之ニ爲シ天道アメノミコト之ニ說シテ。
仲尼シズニ篇シテ、謂フ西方シカク聖セイ者ト、是レ設ケ西方シカク淨土シヨウド以ス爲ハ說根本モトワキ。既死ス、豈在ラン我ガ哉ヤ、林木モ之ヲ亦可シ、沉ムルモ之ヲ亦可シ、葬モルモ之ヲ亦可シ、露アラハスモヲ之ヲ亦可シ。衣薪エフニ而棄ルモ諸レラ溝壑カニ、示可シ、衣衣エエ緹モ、裳モ而納ルモ諸レラ石樽カニ、示可シ、唯タダ。

是浮屠謂大葬水葬土葬野葬林葬等全固浮屠
之說皆中國異端陳言而不知胡丘之事一既又放生之說
云說符篇不浮屠始言夫列莊之書謂生死而不止
是知彼有死生之惑浮屠所以謂之者多々迷之者甚者
以之可知也

○藝列キツカトめ吉川氏ヨシカワハ工藤祐經ヨウジンの裔ヨヘイ小早川氏オハラ肥カハ實ヨハシ平比支ヒヂ也
猶ヨリよ小早川中勢チホ少シヤウ將ヨウ詮平子ヨシヒコ毛利元就モリタケル比三男又四郎
隆景タカヒコと養てヒヤシタマフ是シテ小早川權中納言チホウノヨウジン詮平ヨシヒコ子コノ本良元平ヒラマサヒコ
○中西當ミナミヨウハ雲列クモリ尼ニニ子コノ家カミ之ノ麾下ヒヅカ也

○中西堂ハ雲列尼子家の麾下アリ

理會すまし

○太神宮心ノ御柱ハシニテ神官ミツマタノ秘說容易ハシナガニシキト
御柱ハシニテ財物カイモクモリ神官人ミツマタヒト

御巫内人一人
山向内人一人
地祭内人一人

忌部一人
頭玉一人

但忌詣頭工者木本祭之外無供奉云

わがと申されハ何めあすとぞア荒木山
度會の神主に侍^ストモ^{シテ}、
戸主御家平左衛門

○甲陽軍鑑ハ多良坂氏自記と云ふ。後人多くと續て杜撰せし
ツサシ

書くより南紀大園定祐ガ川中嶋・戦辯にくりく是とぞ
天文十六年二月山本勘助信玄に終ヨ大内義隆の滅もとす
義隆其臣陶晴賢に弑チれしハ天文三十年九月也何モ十六年前
の春とぞと云ひんや

筑麻川講和の時謙信自撰原景時が衣冠と称せられ
謙信ハ平ノ景弘の胤自是と考へるべからんや

方臺陽院義昭也
義昭ハ慶長二年八月薨リテ院号とす
す二十余年前ヘ何ぞ此院号と記す
ト

天文六年七月川越夜軍同十五年七月川越の城と北条
氏^{スケ}様^ス軍鑑二度り軍と一時^{シテ}記す訛謬^ハ類^ハ多^シ見^シ

たり其時代年月と考へりとく上杉朝定松山の圍によ
あつて十の巻にあり甚すゝゝ朝定ハ天文十六年七月二十日
川越ニ戰死す法名了念正榮上品海竜寺越後雲洞寺
鬼簿にススメス信玄氏康
松山の城と圍みハ永録九年也其他ハ推てども牧季に
いふゆゑす今世權謀者流甲陽軍鑑と以て説とうす者
此等のあくまと不考へあらんじよ哉

○康正二年三月畠山民張守政長將軍家の命と肩り政長
翁伊与守義就兵と以て河内ノ国より之を宣振にて於て
合戦す政長義就兩軍の旗制衣色同一敬味方分らず
○故政長乳付の旗アリカシメト制衣ノ如キ由南朝記傳
テ

此下落丁錢

元禄十三年立月廿三日
風とくみにあらうとす。
月とくみにあらうとす。
地僻無人訪、
蒸然獨樂天、
桃愁燈大ノ下モト
煎病薬炉邊、
眠歩添霄長キヲ
曾吞駢母恨ヲ
奚不促終正ア
さざれ十日ノ
前大納言家卿光友の訃音トモ
テナカタモトモ大納言家
津辞せの津道とゆきすんきりをどわのうち
すれどもひりんす

きれ子をさひぢうとく
歛喪の尊モニシテ魂帛ミト

藤原為明
新助

御銘旗は故權中納言從三位水戸侯源義公極モトヒラとて
乃くもれたりてちまゝにまづのきよひて風す

山東之風氣

為明

はくはくあらわづみのあめの浦
カマクラのさかんのそば
サシヌキ

セニトウカ
旋入歌の所ありて

少
年
の
切
れ
て
と
梅
ウ
カ
ハ
高
ヒ
ト

と今セテモセナリテ未だアマラクシトシト暮ラサル

うそうほひにすき

東京の室よあすけ
ひらひそん

右あや氏より白葉よしとおへ
竹子は乍詩歌あり

○
清
朝

おまえは君のとおりいまれど、めぐらしちゃう。

卷之三

君の育むわくとまことにあはゆるかの月新

○通書時後經及^ヒ通書大全等之書謂^フ時吉凶者多^シ皆^シ晦^ヲ学

。冬より今宵の月をうかうかひまタる極方にあらぐ
きてもうこのきりよをうそこらへまくされ
毛幼丁のまろやかともううめのびられまよすれ
りもうひとううえもあられううわくとくを喜す
ひて

篠の音きしりゆるすとれくとよもやうナリノ月よし
育々アキラキナリスルカニセシホウハラクモトカニサメ
ノホクミドリガリスムニカニシテアリナリテニキス
てあらかまちあらわすあられにまきてカクチの村をす
ノリ身入仕りて

○月 下 開 風 半 住 晚

林 紗 蕉 雜 翠 烟 寒

秋 送 暫 伴 碧 香 暖

雲 袖 一 懐 自 扇 團

茅 舍 霧 消 影 茂 々

竹 篦 風 亘 露 珊 々

遇 君 更 記 古 詩 字

相 見 時 難 別 亦 難

レウハあれどりれナシ度のあくびソシモシタ後ノ月をさびき

いくゆづけうへ夜のキヌヒシカニシテシテ御指すらえ
古ヘアメキナスモシテシテ名所也アリハ月をさびき
多れどもソシテシテアリハアリハアリハアリハ
今宵ありそむけぬれ事多シカツツツツ月と音をモリん

○護法常應錄三十三卷 禅錄也

仙洞御制序題号亦

弗賜也

此書左少將源吉保朝臣 柳沢氏之撰集丙戌初夏勝宣丸六部
一部禁裡一部輪王寺ノ宮一部妙心寺一部鎌倉立山中
一部東都月桂寺一部侍從吉里朝臣

吉保朝臣室

曾祖氏也

以古紙錄二卷為附錄云

○相送相迎月下門一朝恨是丁霄恩

春川立尽錄苔路幾拂落花首履痕

「ルハ」傍核川作也

不意獨窓殘夜夢

佳君同宿解愁情

覺來枕上無人語

只扣曉天鐘一声

これハ汚義堂、詩也トシテ雪嶺が夢中撫キ欲相語

破曉風驚又断腸と仰クハ塔れあす、モニハヘ

仇戀慕の詩ハ我國の人多シモ仰クアリハ和哥にて

情と連び仰ク

吉昌ト

唐人の情と連び仰ク

詞

仰ク

窓残夜月、人何處、簾捲東風燕復來」と仰クハ後の朝
の情。遠信無憑丁北還、東風吹恨滿春山。予聞到蘭花又
丁年不_レ成佳夢、只孤眠。ふと云く「あらつゝとゆせ」勺
さうさう支頤幾度、綉停針、秋入天涯恨轉深と誦セー。
わうすす、さうつむづづき、我ハ雲外作紙も今にり若
しよも通じれ、すゞしへりん

○我国年号大宝と始とす其ニカニ年号ありニシテ一ツの
年号あるまにて佛書より、抑年号ハ史にのみある
りうべしとも史外の年号あらず之は紀年通譜に

道書と引きて赤明上白王金極永壽等の年号とす又楊雄
蜀王本紀に望帝位と敵龜吳よ禪リテ後敵龜吳と叢帝
と称一年と方通と考すは事あ紀至り一に及ぶ
房列傍山の町より竒麗うる美所ぞとけ如来よりかくも
靈験りしとゆますりそり年詣めへ絶えず
多くなりまほの町人々はけりト女けや坐とハ法ノイ
レアレモハ清で青々涼^{サスガ}る本聲^{ミテ}をきゆうりてすりハ歩^ム
まよひすりてすり歩^ムすり金^カり初^シ地とはああよ
とく我勘^シくよしきもくすすよニ年よ以^テりぬ

或時は女里を往かうとしておまごと様くやなだらう
て晴るゝよ様あらひよ紫の中うち大烟アサヒ
あはれ女アサヒトロキルもすみは煙てうへ又、様ればともほ
よのすゑおのむけのわ、ありやうておがゆいにし併に女
おもかきくよけゆと行つてゐたるつまうそでれ也
うきわの怪くしげもまうきみハヌキモソトは、やと
トシイイダ
トシイイダ
あはれをめぐらす、おまくはせりけ女里をはりて
うねる事とほほんぢてあはれ、叶ひまことに
うねる事とほほんぢてあはれ、叶ひまことに

三十里女とと滿て活あんが歩て門前よと
手を系附身の按テアリトテアリトテアリト
御子代醉編王行甫云家兄嘉甫衣と解
孝子也モナリバあり又ノリと接け聲聲の申イ
流彦す是ハ陽氣元節卿り活く貴微より
モニ微セ

右ノ御人の作アリて名アリテテテテテテテテ
トモカタノ魔アリテ仙験アリナ活屠氏也
本ノシテ世と連ウナキ事。無ニヤ

○河野家系圖シ按ズルニ

品孝靈天皇
一ノ御子 徒一位諸山積神社
大宅姓 三嶋大明神是也
二ノ御子 兒嶋氏祖

小千ノ御子 河野氏ノ祖

按スルニ此系圖大宅姓ノ祖ラシ三嶋ノ神トス夫伊豫三嶋

神ハ大山祇ノ命ニテ元韓ヨリ降リ偏ノ由釋日本紀ニ見ヘ
タリ今孝靈ノ帝孫ヲ以三嶋ノ神トスルト蓋三嶋ノ

別宮後神号モ亦諸山積余ト号ス書メ以傳レ疑
○寶永三年丙戌十一月二日夜半刻勢列山田中嶋
お大山切付悉ノ焼失置木ノ東尾部坂アリテ大内

三月の申ノ刻ニ起ル神宮無恙源々トキヨ月讀及大同國生
の社のカトリ左來些矣もくとくと歩社無事
カリ宮司并ニ經亘檜垣三位の館と號ス松ノ社瓦等
のあらわせとく御同廣新町少彦少リ
流經大山寺今ニテ寺院之御廟也塗口本堂
寺院大門前御門以三間軒イス夫軒牆三間
小寺也

三月廿七日

大同寺

品清天皇

御門

金

聖朝實錄卷之十

元龜二年九月十二日平信長屠延暦寺_ニ桓武勅願
天正十年六月廿六日菅原利家屠能列石動山天平寺_ニ天智勅願
天正十三年三月廿二日豊臣秀吉屠紀列根来寺

天正十五年四月豊前國彦山伏_ニ豊臣家之金

捕ナリシ後唐氏中世周主は尊号を承りて驕慢自
恣シテ所々刻ムニシテ備へ身骨とまつて
多引圍困と押伏して多めの害と云フ法列多カレ
某の山ハ後唐武備堅固にて勢ひ降するか
ナリシテあり某此ちハは廻處をもつて凡人の
レウムシ不被済あり奉勅も廢すつて某は
者ハみ天狗と云フうそあひてくら

三
ナリモ不入り地トモ。佛と華やきと云物
エト振ひて食事と先セテ、タリ石年シテ
幸名将のこれ等の形法と脣キルあつて人際法
トモラキモカトキヘ活法作ト御事と止
シキトキナキル今ヨウテ於テ万葉の
高きトキテ一ツと因カタチム佛と云すよナリ
ス後社の神人ナチセヒテ歎とされ御とぞシヨ
天五ナリテ後部ヨロニ 家像勢圓坐れシキヨ
天五ナリテこれは佛等一財の富貴と食ノ布て
天五桂冠ナリヘシテ佛盧トモアリ不有シ
トモ其のえり驕慢めありナリ ある不入り

○
事ニシテ佛等トモヤ人望トシテ
ナシテナリハ 不念ヨ 例ノ今ハ幽セリナリ
モ元治後年佛祐と組て己と別ニ 駕元
不満ナリムと欲シテ ある不入り不
自滿ナリ故別ちるく もも令うすして
軍事の件り難と云はチサトシナリモタクハ
不満不満ナリ エハナレ 無シこれは証ヒと發
シテ自走行は極まリありハ一トとよひか
シテ「前り地と活リ」タバムサトノ演
害レタと喪ナリ考ハアリ まとあく

すとて備ふより不入り下とせんとく

至愚の事とぞとぞとぞ

出。今川の赤手とて赤手とて赤手とて赤手とて

赤手とて赤手とて赤手とて赤手とて赤手とて

赤手とて赤手とて赤手とて赤手とて赤手とて

赤手とて赤手とて赤手とて赤手とて赤手とて

赤手とて赤手とて赤手とて赤手とて赤手とて

赤手とて赤手とて赤手とて赤手とて赤手とて

赤手とて赤手とて赤手とて赤手とて赤手とて

赤手とて赤手とて赤手とて赤手とて赤手とて

○甲陽軍艦に云氏席了達つて人ハ後立

ト入後立了達つて人ハ後立

後立了達つて人ハ後立

後立了達つて人ハ後立

後立了達つて人ハ後立

後立了達つて人ハ後立

後立了達つて人ハ後立

謀害仍出鄉而隱

阿弥陀佛一經歴諸列^ス永亨元年到^ヨ河國松平郷^ニ

一說曰普廣院義教永亨十一年二月討鎌倉持氏
改國東制法將下搜新田氏一族七十之源有親父子潛出
德川鄉七世居之逃作時衆持氏始應永二十三年十月伊豆國拔落其後販鎌倉然為義教矣
一說曰德川下野守滿義屬新田義貞而勤王新田氏不得
其志而亡矣自此德川家通志於吉野右京亮有親滿義
嫡孫脩理進親李子也

奉遠列井伊谷宮之令子足利之兵戰處於信列並
合王家歿亡有親友令子三河守親氏被執而入京師時
有遊行他阿上人在洛乞其金爲時衆所謂長阿德阿是
也長阿示寂之後德阿入參列坂井村今作移居松平御
松平太郎左衛門親氏武畧聞近境士庶奉為主云

至今崇敬遊行上人者謝先祖往日之恩也云

三說似而不同未說蓋有故者次夫親氏主興起也似
明大祖其八世世所謂至譜以親氏奉親信光為三代然奉親者親氏
令第先代信光下令後讓家故八世九世之異アリ

神君御天下光化被宇內嗚呼其神其武万歲之供基汝
奉書大書禱筆亦實雖有其恐而為遺忘私記此

○有親主親氏主入三列之年我敬公所述大相國年譜序
為永亨元年己酉

天文十一年壬寅十二月二十六日 神君降誕

或傳云生天野清石衛門某之家其妻初奉御乳味云
自天野孫四郎景儀仕親氏生而以來子孫代奉仕
德川家嗚呼不朝一夕之公恩氏族宜殺身而尽忠者也

○参列猿投山神宮寺徳川家御住跡ノ中

親氏公

康安元年辛巳四月二十日卒去トアリ

恭親公

永和三年丁巳九月二十日卒去トアリ

右年号可疑康安元年ハ尊氏薨後四年也永和亦義滿代也然有本據次家忠日記増補追加発題曰親氏主康正二年四月廿日卒恭親主其年九月三日卒是實錄ナリ

信光公

長亨二年七月二十七日卒去也

信光ハ恭親ノ御子トアレニ實寔ハ親氏ノ男也

○康安元年ヨリ長亨二年マテ百二十八年也御父

御死去後コレホド遠キ不審矣

恭親ノ御子ニシテ永和三年ヨリ長亨二年迄百十二年セタヘハ恭親御卒ノ年ニ信光公生レタマフトモ御年百十二歳十ルヘシマシテ親氏ノ御子十レハタトヒ親氏ノ御卒年ニ信光公生レタマフニ御年百二十八十ヘルシサノミ御長壽ノ沙汰ナシ此御卒年可疑恭旦御系圖ニ永亨元年参列ヘ親氏入御トアリ又一說義教將軍鎌倉ノ持氏ヲ追テ後新田ノ末ヲ搜ル故ニ有親親氏御父子徳川ノ御ヲ出タマフト云持氏没落ハ永亨十一年後康安元年ニ後ヲユト七

十九年永和三年ニ後コト六十三年既決シテ親氏ヲ

後光嚴院ノ御守ノ御人トスヘカラス

○元和八年四月大久保家ノ書ニ親氏主應永元年逝去

泰親主永亨二年卒一トキニ中りんすす亦お遠セ
。多岐洋山同舟新緒よ唐にハ行ぬヨシヤアキ
老くすくらひもくちうとくとくと參もも幸にハ價
多岐洋山新緒もくとくとくとくとくとくとく
きアケバまくとくとくとくとくとくとくとく
家よもじうくあとくとくとくとくとくとくとく
人ニワカの雁雲賤南幸流セトクア
くよもじうくとくとくとくとくとくとくとく
人ニワカの夷物ニワカを世流すアリ候今と
か一紫衣青色と墨ノ子と云ふや候今アリ

○信玄家臣惣騎馬數通計九千三百四十騎卷三

せりもまことにはありぬ歟と云ひて
リツカ人、うそと云ふ事はあらず。されば、淫弱なれば
こそくと傳ふす所にあらず。まことにあらん
ハシレテ、うそと傳ふす所にあらず。まことにあらん
今りせと清うるを色にひめ中へりゆて御
教ふべし。軍事、おもての事、終て古事記
をりりあめ。さうよ當軍列の事、教ゆる軍
は考へる。文官めち。れどと傳ふて自勝能うる
かわく。焉を極とて、未云。のほしきを言如何
か。あん一軍十六万人。嗚呼。

○木工兵衛入道不聽
本願

前趙 刀劖大守 麗岩大功宗輔居士

持是院從三品法印權大僧都大年樞公

妙全

卷之三

右濃列汾陽禪寺の経碑

秀才の如きは

行軍一歩歩き比ひよかの如きの筋書きありま村より

先づ二月の比物より車を賣つて御用賀と申す
ゆゑもうまき御事へよろしくおどりもて
足りずされは

御内侍、少子、以之、御内侍也、免冠、之、御内侍也

叶之有八 源光友鄉詩稿也

。歩級ちゑ少捕元真法名
淨安と歩級此うと云也。此も後
行刑級大相済法真の事す。後
され後歩級といふ事也。とされ
る。

卷之三

○前權中納言源家久源氏右大將頼朝の鳴津豊後守也
○十三世修理大夫義久の子也

○吉田宰相源禪政左衛門の祖父池田紀伊守恒和始万松院
義晴將軍に仕へた後將軍江列完太の山中へ薨す後雍

○後毛氏ハ源氏左大臣融の子孫也
髮して宗傳とは名々尾元よりれり

一説に獨身仁明天皇の才三皇子右大臣光の四男左少將源貞のみ活ヒ數々子綱と申レア

尾府下奉仕少佐也承綱子承次又十三世右馬先滿綱鹿苑院大相國少佐武者所之有其玄孫承祐

道調參列額田郡浦井村移り住む一某年深秋

範経

長親主ミツシマ 信忠主ヒツヂマ 亨祿二年五月廿八日に卒す
尼子ニシ代タケ 德川家よしより

○参列の宇氏ハ權中納言平知盛の子右馬助雅宗と宗
林子也

○小寺官兵衛孝高ハ黒田義濃守源識隆の子也識隆ハ惣刃
赤松の族小寺藤兵衛政識マサシキが養子タクシテされタクシテ孝高
の孫右馬ウマ佐忠之タカシマに承平の姓と號タケシマす
以監米ヲ醸マサニ奥マサニ為マサニ道熟マサニ而食之マサニ

○籬スギ
俗作鮮マサニ非也

字書にて所考れは御名のすゝよ近き處

魚鱗物

魚簞音ハ魚ニ

魚鮓音ハ先新

魚

魚也

魚也

○清人種々の餘と移板シラフて海シマすアホリウチアホリウチ、小兒コノ家
のアホリウチアホリウチすアホリウチアホリウチ御圓経マツコウ等ドウの
麁アホリウチアホリウチアホリウチ文雅マツコウアホリウチアホリウチ足アホリウチ
頃アホリウチ生財三百六十行アホリウチ圖アホリウチと得アホリウチアホリウチアホリウチに
多アホリウチ町アホリウチアホリウチアホリウチ招牌アホリウチハ体アホリウチアホリウチアホリウチ看板アホリウチ
アホリウチアホリウチの牌榜アホリウチと一般アホリウチアホリウチアホリウチ賣沽アホリウチアホリウチアホリウチ遊人の
情アホリウチ後漢アホリウチカリアホリウチアホリウチアホリウチ作アホリウチ

○木犀モクセイ 詩朱子文集九モクセイ予ヨシめて筆と樹作モクセイ及モクセイ

抄モクセイて存す

喬木生夏涼モクセイ芳蕤散秋馥モクセイ

未覓_ニ歲時_ノ寒_ヲ
扶疎_{方ニ}遼_レ屋_ヲ

。酉七月に日落笠亭了。席降りて市井比男女集スケカサテ
乃はは風カクれり、傍ヨリあへアハる。長修町
辛巳カニの七月十九キウ拿カニと申シテす。秋廟アキカセ
ねと申揚シラフけケくと申シテす。女メイ室シマツと申シテす
麻シナモを洋ヨリと申シテす。府下ヒラシタの男女室シマツと申シテす
れひよ御ミサマと申シテす。すうや徳トクと
より達タツめち徳トクと申シテす。松樹マツツキと申シテす。孟宗モン宗と
申シテす。御縫ミシテめメと申シテす。風カキ
吹キけケと申シテす。あく人アクヒンと申シテす。いりれハハシシ
あくすりアクスリと申シテす。年イニ。経勢比高キシテヒタツ。

たまふまへのをとまくにけり

○勝宝感神聖武皇帝

天平應真仁正皇太后 光明皇后也

宝字稱德孝謙皇帝

日本尊号是始也

○續日本紀ノ文武天皇即位二年十一月乙卯遷多氣太神宮ヲ

于度合郡

是齋宮太神宮司ニシテノリトハ折く度會宮ハ事

うり少や祢宜の説きより

○延喜太神宮式 伊佐奈岐ノ宮共ニ錄神名一而瀧原友ヒ並
伊雜三宮不錄其神号ヲ但記太神遙宮而已其為

秋津之兩神伊佐波止美玉柱屋ニ金則何不書其号乎
若風宮者延喜以後所建次所摂社無其号一又度會宮
別宮土ノ宮者原大宮地神靈也帳儀式其為大年土ノ御祖
宇賀御魂三神者蓋後配享次折祢宜所附會次或ハ
二座或三座夫亦不決大神宮摂社二十四處之内大ト土
御祖ノ社三座國津御祖ノ社二座度會宮摂社十六處之内
度會國津御神社一座是皆本居初住之人而直不
奉靈祠次

是矣丁本末して以神之送之其後とて用ひ

○顏之推家訓云凡庸之性後夫多寵前夫之孤後妻必
前妻之子後夫沉惑色欲後妻懷嫉妬之情

又云、婦人之性、率_子寵_一、子_母婚_一、而_ニ虐_ス兒_{ヨメ}、_一婦_シ、和謨古今同_{シカ}、

噫和謨古今同欵

○住吉諸神事次
才日六月晦日荒和早旦御供備
進於住江殿兩官東帶氏人布衣着之已刻先氏人總

官在龐 神官等於下客殿邊着座各
有坐次權步祝酒面々前へ杯入之後祝言
祢宜申之次酒一獻後魁管取割天次
矛返次立座列立下ノ客殿東手水進之至
氏人冠木綿役次參御前於開口御宿院ト
頃宮ト両方ノノ假屋賦昔陪膳役面々取
之取割天返ス云々

○万葉才三丹生王歌曰木錦牛次可比奈尔懸而天有左
佐羅能小野之七相菅手取持而久堅乃天川原尔虫立
而繫身而麻之手遠里小野近所也
同才六十鳥鳴其佐保川丹石二生菅恨取而之努布草
解除而益乎往水丹繫而益乎

○無題詩集ノ六月役ミナツキハラ 法性寺入道殿下
世上爲流例熊林鐘晦日

御除象詠無他詠千年頌期有定期六月風苔地燎
迷迎夜処石湍冰冷欲秋中未知何物号菅稜結草如輪
令首蒙

○倭姫命、世記ニシテ若子ノ命以ニ麻神カミスカト、葛羅靈等ヒトカラタナシトヲリテ、倭姫命而今ム後解ハトアリ

○天津祝詞 喜撰式 ニ天ヲハナカト云ト云ヘリ此心ニテ心得モト
○周列氷上山ノ傳記固ヨリ附會多シ其中ヲ抄ス彼二曰
天已ニ岡ケテ圓カナル物現ス其ナカ中三鳥ノ神坐マス 國常主
此神即天ノ主ニシテ太乙ト称ス 天ノ御中主北辰尊星此ノ一鳥五星ト
化ス立行ノ神又七里ヲ生ス立行ヨリ天神七代ヲ生ス

按^{スル}ニ是道家、説テ我國ノ神名ニ習合セル説也周易、國

都濃郡就鷲頭山星ノ宮後^ニ同國氷上山ニ移シ妙見星壇
ト号ス是本百濟ノ琳聖來朝シテ祭リ初シト云々^{カタマリ}
。長列大内氏ハ北辰尊星供シ家れ作^ト子列河野氏ハ^{ヲホチ}
八大龍神供ヲ脩サ^ル而^ハ有財^{アリ}ヨモ^ハ淫祀多^シト^ハ
。勢列國司北畠ノ居城初メ一志郡^{イチナシ}多氣庄其後多氣郡^{タケ}
田丸御所飯^{アリ}弘大河内御所同郡坂内御所^{ハシナシ}三大將^{ミツヒサシ}と^ハ將^{ハシナシ}
令^{シテ}監^シし^シと圓^{ムカシ}の三大將^{ミツヒサシ}入^ル後^{ハシナシ}
一志郡^{ハシナシ}浦^{ヤマ}所^リ弘^{イワツキ}内御所^{アリ}浦^{ヤマ}所^リ公^モ
官^{シテ}シテ^{シテ}松^{モリ}ト^{ハシナシ}モ^シシテ^{シテ}修^ムト^{ハシナシ}
。小野ノ通風^ハ敏達帝^{メイタクテイ}メ七世參議峯守^{ハシタケス}又ハ大貳^{タケニ}葛^{ハシナシ}經^{ハシナシ}
麒麟抄^{ハシナシ}に序^{アリ}人^{ハシナシ}うり^{ハシナシ}修^ムト^{ハシナシ}テ^{シテ}書^ムリ^{ハシナシ}丹波^{ハシナシ}

戸村の林氏は、云松河の里の通風の流れに墳と云
○天正十八年八月移り、お寺を卒業して入江武蔵守豊後守
伊勢ノ城へ移り、入と云ふ

○一筆、伊勢ノ城を文忠年中、そのうち、年光憲忠の子臣
林翁が移り入て、通風築き初うか、そこには比と云ふ
高佐主事改め城主として、室町小源氏より属して
あり。十四年、お寺をモリ川村三郎左衛門と
伊勢の城と云ふ。主政は、柳吉と丹波守と云ふ。
○是れ真田信玄の夫人と、牛若子の母と、多子攻て
移り入て、元和十一年新丁の附と
築き廢園と云ふ。モリ川村三郎左衛門の家、万世の法基

○元和二年四月十七日、お寺を、高宗と嘉門と云ふ
多右衛門の娘と云ふ。そして十八日の朝、高宗と、ハサウエ
浦瀬の城の附連移り、やうおどりと云ふて、それ
終りれど、お寺の内を、今きて、四月ねの夜、
三度、お寺を連移す。

○お寺を連移すが、都の都ハ移すをちりば
めの様で、せども、高宗と云ふと、お寺を連移すが
は、お寺を、お寺を、お寺を、お寺を、お寺を、
お寺を、お寺を、お寺を、お寺を、お寺を、
お寺を、お寺を、お寺を、お寺を、お寺を、

ねのあうとまわらうへる年もうへて
くはるく候す

。石田、さし年一財力を高めとまよひの往來を
拵て八幡山の法事に附す。慶祝にて
吉金十枚りされ。幸いして、お詫問して
御殿と申ひて、かの経は附了。極くられ
清き。うれちの契利新吉比野子より
おのれの御子とおれ。おうじ。一と御會を
お道と申されは。おうじ。

。石田はかのりまき。おのれの御子が焼
き。おのれの御子とおれ。おうじ。

。元治二年二月。おのれの相國東海の御後
退里列酒等。令して名一室。ある所と申
く。おのれと桂。おのれ。四年六月。おのれ。
おのれ。今。おうじ。行人。おのれと辨す。告
公の御也。

。甲午年八月。おのれ。おのれ。おのれ。おのれ。
清流。おのれ。おのれ。おのれ。おのれ。
。甲午十九年。おのれ。おのれ。おのれ。おのれ。
車。おのれ。おのれ。おのれ。おのれ。おのれ。おのれ。
と。おのれ。おのれ。おのれ。おのれ。おのれ。

○後元周作序 守神重著す
上月記之 二年十二月 因修道中
と月夜に近江守村源忠等三人入草
長治元年十二月ニヨリ後主と新て

祐秀と至り 甲子二年八月晦日

作事は居候の。不思議け死せよあれども
事々) 将軍ノ面接の往來年紀と甚ち一時
は往と不思議也

○或人曰高村是信所ナウテ鷦^{ニギリ}と振^{ハシマリ}と揮り
我方と仰^{ハシマリ}と我厚ん者と云は第厚ん者
一世^{ハシマリ}二年^{ハシマリ}三^{ハシマリ}四^{ハシマリ}五^{ハシマリ}六^{ハシマリ}七^{ハシマリ}八^{ハシマリ}九^{ハシマリ}十^{ハシマリ}年

人をほり^{ハシマリ}と云ふと古くあくの切名
自^{ハシマリ}あ^{ハシマリ}と人情^{ハシマリ}と云ふが^{ハシマリ}人^{ハシマリ}と
う^{ハシマリ}疏^{ハシマリ}の^{ハシマリ}と^{ハシマリ}生^{ハシマリ}る^{ハシマリ}と^{ハシマリ}有^{ハシマリ}て
往^{ハシマリ}被^{ハシマリ}と^{ハシマリ}見^{ハシマリ}一^{ハシマリ}回^{ハシマリ}と^{ハシマリ}振^{ハシマリ}と^{ハシマリ}吹^{ハシマリ}と
不^{ハシマリ}よ^{ハシマリ}自^{ハシマリ}と^{ハシマリ}して^{ハシマリ}と^{ハシマリ}お^{ハシマリ}と^{ハシマリ}吹^{ハシマリ}と^{ハシマリ}と
あ^{ハシマリ}す^{ハシマリ}と^{ハシマリ}と^{ハシマリ}隨^{ハシマリ}後^{ハシマリ}と^{ハシマリ}と^{ハシマリ}振^{ハシマリ}と^{ハシマリ}と^{ハシマリ}と
吹^{ハシマリ}と^{ハシマリ}攻^{ハシマリ}と^{ハシマリ}と^{ハシマリ}お^{ハシマリ}と^{ハシマリ}と^{ハシマリ}吹^{ハシマリ}と^{ハシマリ}と^{ハシマリ}
あ^{ハシマリ}す^{ハシマリ}と^{ハシマリ}と^{ハシマリ}お^{ハシマリ}と^{ハシマリ}と^{ハシマリ}と^{ハシマリ}吹^{ハシマリ}と^{ハシマリ}と^{ハシマリ}
教^{ハシマリ}と^{ハシマリ}理會^{ハシマリ}と^{ハシマリ}事^{ハシマリ}

